

## 魯迅その小説の思想

林田, 慎之助  
九州大学文学部 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/9774>

---

出版情報 : 中国文学論集. 9, pp.83-118, 1980-11-01. The Chinese Literature Association, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :

## 魯迅その小説の思想

林田 慎之助

魯迅の中國小説史論を語る場合、直接的な資料として『中國小説史略』と『中國小説の歴史的變遷』の二著をあげるができるが、外にも中國の小説を論じた「六朝小説と唐代傳奇文とはどのような區別があるか」、「三藏取經記について」、「宋明間の所謂小説とそれ以後」といった單獨論文があり、これも参考になるであろう。

『中國小説史略』は一九二三年（民國十二年）に上卷が上梓され、下卷はその翌年に刊行をみるが、これは上卷發刊の三年前、魯迅が北京大學と北京師範大學で小説史の講義をうけもつようになって、そこで講述したものをまとめたものである。さらに具體的にいえば、この兩大學で魯迅が小説史の講義をはじめたのは、一九二〇年（民國九年）の秋からである。その時弟の周作人はすでに北京大學の文科系教授をつとめていた。本來北京大學で、小説史

魯迅その小説の思想（林田）

の講義を割當てられたのは周作人であったが、自分よりも兄の方が適任だとして、魯迅を講師に推薦した結果であった。その二年前に、魯迅は『新青年』第四卷第五號誌上に、小説「狂人日記」を發表し、小説家として本格的な活動期に入ったばかりであった。魯迅の文名は「狂人日記」で一時に高く、北京大學も小説史の講師として彼を喜んで迎えたにちがいない。

周作人が北京大學附屬國史編纂所の編纂員となつて北京に入ったのは民國六年の四月であり、魯迅はその年の七月、張勳の復辟事件に憤つていちど教育部を辭職したことはあつたが、事件がおさまつて復職し、あいかわらず漢魏六朝時代の拓本の研究をつづけていた。彼を教育部に招いた蔡元培は當時北京大學の校長に就任しており、その大學の文科學長には陳獨秀があたり、雜誌『新青年』を主宰していた。この大學と『新青年』を舞台にすでに新しい文學革命運動が準備されていた。おなじ民國六年の一月に遠くアメリカ、コロンビア大學に留學中の胡適が「文學改良芻議」を『新青年』に寄稿し、所謂言文一致の文學を提唱、つづいて二月に陳獨秀が「文學革命論」を『新青年』に發表し、文學革命ははじめて運動としての具體的なプログラムをもつことになる。しかしながら、そのプログラムを藝術的に立證する小説の出現はいまだなく、その二年後に登場する魯迅の「狂人日記」を待たねばならなかつた。

中國のながい歴史を支配してきた禮教に人間が人間を喰う喫人の思想をみて、その犠牲者である狂人の目をとおして、禮教思想を内部から告發した『狂人日記』は、その深刻な主題の重たさに加えて、最初の白話文で書かれた言文一致の小説として、まさに革命的な價値をもつていた。魯迅はひきつづいて一九二一年（民國十年）の末には

「晨報副刊」に巴人の筆名で中篇小説「阿Q正傳」を書き、中國民族の典型的性格と辛亥革命の悲劇を、阿Qという農奴の生活をとおして描破した。その間に「孔乙己」、「藥」、「故郷」などの名作を續々發表し、すでに魯迅の中國文壇における地位はゆるぎないものとなっていた。その傍、北京大學、北京師範大學の教壇に立つて、彼は小説史の講義をつづけたのである。古典文學研究の一環として従來蓄積していた小説史研究の素地をいかして、小説史の講義のための着實な準備に、彼は追われていた。

『中國小説史略』の序言で、「講義が拙くて、聽講者が或いは了解しがたいかもしれないことを心配し、その大要を書き、謄寫にして聽講生に分けた。更にこれを寫すものの手數をおもんばかって、ふたたび文言に縮め、その舉例を省いて要略をつくり、今までこれを用いた。しかも終に活版に附したのは、謄寫があまり度々で、その事に任じる者が實はもう草臥れたからだ」と魯迅は語っている。『中國小説史略』は文言で書かれているが、それは謄寫プリントの手數を省くことが主な理由であったことが、これでわかる。ただし今日の『中國小説史略』の體裁からみて、その上梓にあたっては、講義要略のプリントでは省かれていた舉例を、またもとにもどす作業がおこなわれたとみてよい。

『中國小説の歴史的變遷』のほうは、一九二四年（民國十三年）、孫伏園らと一緒に西安に旅行、西安大學の夏期講座で二週間にわたって集中的に講述した小説史の筆記である。したがって、こちらは白話でまとめられている。しかも小説の舉例が全くなく、主に中國小説史の發展過程に焦點をあわせ、まことに要領よく語られている。これは前年發刊した『中國小説史略』の講義をもとに要略したもので、大部分が重複しているが、なかには新しい見解も

はさまれていて、魯迅の小説史觀・文學觀をうかがうには、このほうがむしろ要を得ている。

魯迅が中國の小説に關心をみせはじめたのは、辛亥革命前後からである。漢代から六朝時代までの小説の逸文を蒐集した『古小説鈎沈』には、一九二二年の序文がついている。唐宋の傳奇小説を集めて校勘を加えた『唐宋傳奇集』、明清の小説家の傳記や逸話を集めた『小説舊聞鈔』など、いずれも中國小説史の講義の過程で副産物として編まれたもので、これらの資料集をみると、魯迅の小説史の講義がいかに用意周到な準備の上にたつておこなわれたものであるかを知ることができる。

清末小説史の研究者で著名な阿英に、『中國小説史略』について」と題する一文がある。『中國小説史略』についてまとまった論評を下したものは意外となく、私の知る限りでは、この阿英の短い論文ぐらいのものである。その冒頭に阿英は「中國の小説が專史をもったのは、魯迅先生の『中國小説史略』にはじまる」(阿英文集)というように、それまで中國には小説史というものは、皆無であった。魯迅も「あつたとしても、まず外國人の作つた中國文學史のなかにみえて、しかる後に中國人の作つた文學史のなかに取入れたのであり、然もその量は常に全書の十分の一に及ばない」(中國小説史略、序言)と語っているが、それが當時のいつわらぬ實情であった。その原由はにかかつて中國知識人の小説輕視の思想にあつた。清末になつて、梁啓超、嚴復などが小説の重要性を説くまでは、從來中國知識人の間では、詩にくらべて小説は俗文學として輕視されてきた。實際には彼らの間でも、小説は秘かに廣く讀まれていたのであるが、主に民間のなから發生してきた小説、戯曲の類はおおむね白話で書かれていて、民衆の間で愛好されてきただけに、文言で詩文を表現することになれた知識人は、それを低級なものとして蔑

視する意識が生じたのである。それになんといつても中國知識人の思想の骨格には、經世治要を第一義の使命とする儒教があり、小説は所謂道とはかかわりのない街談巷語の類いで、とるにたりない話とみなされ、民衆がそれを娛樂に供することはあつても、詩のように經世治要のはたらきをもつ文學の範疇からはみだすものと考えられてきた。したがつて小説に關する論評にはあつたが、それは片々たる斷簡にすぎず、隨筆文のなかに散見できる程度のものであつた。このような實情のなかにあつて、歴代の小説を歴史の流れのなかでとらえることを意圖し、それを完成させた魯迅の『中國小説史略』がいかにか畫期的な仕事であつたか、容易に想像できるであらう。

## 二

清末になつて小説を重視する風潮が生じたのは全く新しい事態であつた。小説が人間の教育に豊かな意義をもつものであると考へ、小説に經書、史書以上の價値を認めようとした嚴復が出現し、小説こそは社會民心を一新するに有効なちからをもつものと考え、さかんに政治小説の必要性を説いた梁啓超があらわれ、更には、小説は自己の理想美の具現化したものであると主張し、それ自體の審美的情操に價値を認める黃摩西などがいで、從來小説を娛樂の一道具とみなすか、さもなれば、風俗紊亂の害毒をながすものとしかみなかつたのにたいして、この時期、中國の小説觀は大きく變らうとしていた。

林琴南が『椿姫』をはじめ、シエクスピア、スウィフト、スコットなど西歐の小説を百五拾種ほど翻譯したのは、一八九九年のことであつた。この翻譯は外國語に通じない林紘（琴南）が、外國語のできる者が譯したものを

更に美しい文言の文章になおしたもので、一種の翻譯小説とでも稱すべき種類のものではあったが、その影響は大きく、少年魯迅もこれに親しんだといわれている。後に東京留學當時、魯迅が弟周作人の協力を得て、東歐スラブ系民族の作品を主に譯した『域外小説集』を出版したのも、林紆の翻譯小説の紹介から刺激をうけ、さらにそれにあきたらぬ思いがあつたのであつた。西歐の作家よりも、中國のおかれた情況によりちかひ、東歐弱小民族の作家から作品をえらびとり、たとえ英、獨語からの重譯であつても、翻譯を排して、じかに外國語から翻譯しようとしたことなどは、林紆の翻譯小説の域を懸命にこえようとした魯迅兄弟の工夫と努力のあらわれであつた。

林紆の翻譯小説が出版された二年前の一八九七年（清の光緒二十三年）に、嚴復は夏種卿との共著『本館附印小説緣啓』において、小説が文學の正統的なものであり、豊かな教育的意義を有するものであることを、いちはやく指摘したといわれている。阿英によると、この論文は七千五百言におよぶ長篇で、進化論の原理を基礎にすえ、人類文明史の發展とからめて、中國及び諸外國の著名な小説から小説の重要性を説きおよび、小説の價值が經書、史書の價值を上廻ることを計量したものであつた。嚴復はハクスレイの『倫理と進化』を『天演論』と題して翻譯し、進化論の思想を中國にはじめて導入して、當時の哲學の主流思想の形成に大きな役割を果した人物である。魯迅思想の根底にある進化論の發想はこの嚴復の『天演論』を媒介としたもので、これによって魯迅の思想の骨格が形成されたのだから、その影響にははかりしれぬものがある。嚴復が『本館附印小説緣啓』で提出した意見も、人類文明史の進化發展に小説が貢獻する意義の大きさを説いたもので、それは當時としては、從來からの陋習にならずで小説蔑視観をかたくなにいだきつづけていた多くの人々を驚かせるに充分であつた。

この嚴復につづいて、康有爲の強い影響下にあって變法維新の旗手として活躍していた梁啓超は一八九八年に發刊をみた『清議報』第一號に、「譯印政治小説序」を發表して、小説を好むのは人間の自然の情であるという考え方をあきらかにした。それを踏まえて、小説が社會改革に有効な武器であることを説いた「小説と社會の關係について」などの論著をやつぎはやに世に問うことになる。「小説と社會の關係について」では、「今日社會を改良しようとするならば、必ず小説界の革命からはじめねばならない。國民を一新しようとするならば、必ず小説を一新することから始めねばならぬ」「なぜなら、小説には人間を支配する不思議な力があるからである」というのが、その結論となっている。

このような小説重視の風潮が急速にたかまってきた清末の情況のなかにあつて、魯迅が小説への關心を抱きはじめたとしても、いっこうに不思議なことではなかつた。もともと自然科学の學問を身につけるために、日本に留學し、仙台で醫學を學んだ魯迅であつたが、中國民族の魂の救済は自然科学ではできないとみて、それを放棄して以來、魯迅の文學志向はまず内外の小説に思いをひそめることからはじまっている。『域外小説集』の編纂刊行はその一環であつた。東歐弱小民族の小説を翻譯するねらいは、中國もまた東歐の被壓迫民族とおなじような社會境遇にあると考え、それらの國々の悲憤の文學を中國に移植することによって、中國民族の覺醒をうながし、中國小説界の氣風を一新しようとするにあつた。この點では、梁啓超の小説は社會改革にとって有効であるとみる啓蒙的な小説觀の洗禮を、魯迅もまたたしかに受けていたとみなすことができる。

嚴復の進化論を基礎においた小説觀が魯迅の小説觀にどれだけの影響をあたえたかを、正確に測定することはき



わめて困難な作業であるが、外國小説の翻譯紹介に失敗し歸國した魯迅が中國の小説に思いをひそめ、『古小説鈎沈』を編み、やがて『中國小説史略』を講述するようになった時點で、小説を歴史のなかの事象としてとりだし、歴史として語る過程で、人類の歴史が進化の歴史であるならば、小説の變遷の歴史のなかでも、小説固有の進化の法則が存在しているはずだと、魯迅は考えるようになった。ともすれば錯亂しがちな中國小説史の複雑な道ゆきのなかで、そのひとすじの進化の道をもとめようとする自覺が魯迅のなかに確實に根をおろしはじめたとみてよい。『中國小説の歴史的變遷』を講述するにあたっての序言のなかで、魯迅がつぎのように語っているのが、そのなにより證據である。

私がお話しますのは中國小説の歴史的變遷であります。多くの歴史家は人類の歴史は進化するものであると語っています。それでは、中國も當然例外であることはできません。しかしながら、中國の進化の情形には二種類の特別の現象があります。一種は新しいものができて久しい時間が経っていても、舊いものがまた回復してくる。これはすなわち反復であります。一種は新しいものができて久しい時間が経っていても、舊いものがけっしてすたれない。これはすなわち錯亂であります。それならば進化していかないのか。それはそうではありません。ただ比較的ゆるやかであって、私たちのような急性な人間には一日三秋の感があるのです。文藝、その文藝の一つである小説にも自然このような現象があります。たとえ今日に至っても、多くの小説のなかに唐宋的なもの、甚しくは原始人民の思想手段の糟粕がそのままお存在しています。今日お話ししますことは、たとえそれがなお社會の歡迎を受けたとしても、このような糟粕を理解しようとは思いませんし、道理を

無視した亂雑な作品のなかから一すじの發展の絲をもとめることであります。それでは全部を六回にわけてお話しすることにいたします。

このように清末にあつて小説の重視を唱えた文藝思潮の影響をつよく受けとめながら、『域外小説集』の翻譯出版をおこなつた思想的動機は、やはり中國民族の自立をもとめる民族主義的思想にねざすものであつた。その思想に文學的表現を與えようとしたのが、『域外小説集』であつたともいえる。東京で出版した『域外小説集』が賣れずに經濟的に失敗に終つた後、魯迅は故郷會稽の地に歸つて教師をする傍ら、中國の古小説の逸文を拾ひ集める作業にかかつてゐる。これが後にまとめられて、『古小説鈎沈』となる。『域外小説集』と『古小説鈎沈』を並べてみると、外國文學と自國の古小説という取扱う對象に違いはあるが、小説への關心と興味は依然持續してゐることになる。外國小説の翻譯紹介から、漢魏六朝期の古小説の發掘への轉移をどうみるか。表層的な轉移とみれば、小説への關心が外から内に變化したことにすぎない。小説への自覺が清末にあつて一つの思想であつたことを思い、その小説の思想が民族文化の進化と民族自立の社會改革の自覺を意味したことからすれば、魯迅の民族主義的思想が、『域外小説集』の挫折後、一層深化する方向にむかつた現象の一つとして、自國の古小説の逸文蒐集をとらえることもできる。

やがてこれらの内外の小説紹介と研究の作業を基礎にして、『中國小説史略』という未曾有の研究に取組むことになる魯迅が、中國固有の小説の變遷をとおして何をみようとしたのか、古典小説をとらえるとらえ方一つにしても、彼獨自の好みはたらいっており、そうしたかたちででてくる彼の批評をとおして、魯迅の小説觀、文學觀を考

えてみようと思う。これまで『中國小説史略』『中國小説の歴史的變遷』の二著に即して、魯迅の小説觀、文學觀をほりおこす作業はほとんどなされなかったことを思えば、これも又意義なしとはいえぬであらう。

三

魯迅の『中國小説史略』の特徴として第一にあげねばならぬ問題は、小説がどのような社會背景のもとに生れ、その時代性を小説がどのようなかたちで反映しているかに、大變注意して論じていることである。さらに小説は社會生活の變化の上にあつて、どのように前にむかつて發展したか。そしていかに漸次豊富多彩になつていったか、それらのことに魯迅は留意した。云い換えるならば、小説と時代の情況と社會思想を考慮し、それを適確におさえて論じること、魯迅の『中國小説史略』は多くの頁を費している。中國の小説の歴史を語る以上、そのことは當然だとするむきもあるが、この小説の書かれた一九二〇年代以前は云うに及ばず、その當時にこの點に留意して、中國小説を論じたものは皆無であつた。今日でも、歴史的環境、思想的情況が小説にあつた影響について、魯迅ほどに適切な考察をくわえた中國小説史論を發見することは困難である。おおむねの小説史論家は小説の内容の紹介と言語・文章の特質、及び前後の繼承發展の様態に論及することはあつても、時代の思想と社會生活との關連のなかで小説が發生する必然的な契機や小説の意味を考察し、檢證することにおいては、極めて憶病でさえある。今日からみてもこの問題を取りあげることでは、小説史論家魯迅は驚くほど果敢であつたといえる。

元來小説はそれ自體としての藝術的世界をもち、讀者と對應するものであるにもかかわらず、小説の作家は正負

いずれのかたちであれ、みずからが現に生きている時代と社會とのかわりをなんらかのかたちで創作の營爲のなかにいかしていることも事實である。魯迅は小説史論家としてこの事實に積極的な關心を示している。そこに、これまで時代と社會の動きとは何のかかわりもなく、ただつまらない娯樂としてしかみなされなかった小説の地位を見直そうとする積極的な意圖を讀みとることができる。

六朝時代にあらわれた小説に、志怪小説と志人小説といわれるものがある。志は誌すことであって、民間に口頭で傳承させてきた奇怪な出來事、靈異な現象の類を、當時の知識人が蒐集し記録したものが志怪小説であり、魏晉時代の一流の名士たちの言行を逸話風に仕立て誌したものが志人小説である。前者を代表するものに、魏の曹丕の『列異傳』、西晉の張華の『博物志』、東晉の干寶の『搜神記』、宋の陶淵明の『搜神後記』、宋の劉義慶の『幽明錄』、梁の吳均の『續齊諧記』などがある。後者では晉の裴啓の『語林』、宋の劉義慶の『世說新語』を代表作とする。このなかの志怪小説は秦漢以來さかんになった巫系の鬼道信仰と、後漢末に入って六朝になるとすっかり中國に定着してしまった小乗系の佛教信仰が時代の背景にあつて、この二つの道と佛の精神的風土のなから生れてきたと、魯迅はみている。しかも六朝の志怪小説は小説として創作されたものでなく、幽鬼・奇異のことがらは、明界の常事とおなじように實在するものと信じられていたという考えは、どうやら魯迅の持論であつたとみえる。のちに「六朝小説と唐代傳奇文とはどのような區別があるのか」（且介亭雜文二集）と題する雜感文のなかで、唐代の傳奇小説が作者の意識的な虚構の世界を展開したもので、そこに作家の想像的才能をみることができるのにたいして、六朝の志怪小説はそうでなく、實在性の強い談話だと繰り返し發言しているからである。六朝の小説集の類が

たいてい史部歴史書の雜傳の部類に組み入れられてきたのも、その故だと彼は語っている。

鬼神・神仙の話は所詮人間の運命、人間の願望、人間の欲求の不可知的な部分となんらかのかたちで関連性をもつ。しかも鬼神・神仙を實在するものと信じていたとなると、この時代は實在する人間への關心が複雑で旺盛になつてきたことを知らせている。そうすれば、この時期に『搜神記』などの志怪小説とならんで、『世說新語』のような志人小説があらわれて、實在する人間に旺盛な關心を示したのは、當然すぎるぐらい當然な現象であつた。しかしながら、志怪の書はおおむね民間街巷に流傳していた傳承説話であり、志人の書はおおむね知識階級に屬する逸話の類であつた。魯迅はこのちがいをあきらかにふまえて、志人小説の發生する時代情況をつぎのように把握している。

漢末の士大夫階級はすでに品目を重んじ、名聲の褒貶は片言のなかに決したが、魏晉以來ますますしゃれた風格とことばを尙んで、言うことは玄虚に流れ、舉止はことさらに粗放となり、漢が俊偉堅卓を重んじたのと大變な違いであつた。蓋しその頃佛敎は大いにひろまり、頗る脱俗の風をあふりたてた。しかも老莊の説も大いに盛えているが、それは佛に刺激されて老を崇拜するという反動であつた。そして世間を厭離するといふ點では一致しているが、たがいに拒みながらも實はたがいに煽りたてる結果となり、ついには、ながれひろがつて清談となつた。晉の渡江以後、この風はいよいよはなはだしくなり、異言をとなえる者はただ一二の梟雄のみであつた。世間の好尙にしたがつて撰集ができたが、それは或いは舊聞を掇拾し、或いは近事を記述し、叢殘小語にすぎないけれども、人間の言動を寫して、遂に志怪の常套から脱したのである。

しかし、これだけでは『世説新語』などの志人小説が出現するにいたる時代考察は充分でなかったとみえて、魯迅は『中國小説の歴史的變遷』のなかでつぎのように補足している。

この種の清談はもともと漢の清議からきている。漢末の政治は暗黒で、一般の名士は政治を議論し、その當初は社會でかなりの勢力をもっていた。のちに執政者の嫉妬にあい、しだいに害せられるようになり、例えば孔融、禰衡などが曹操に法を設けられて殺されている。そこで晋代の名士になるとあえて再び政事を議論しなくなり、一變して専ら玄談を語るようになった。清議であつて政事を語らなくなる、これが所謂清談となつた。しかしこの種の清談の名士は當時の社會ではもとどおり大變な勢力をもつていて、玄談ができれば、名士の資格が得られなかつたものらしい。そこで『世説』のような書物はほぼ一部の名士になるための教科書とみなされていたようだ。(第二講・六朝時代の志怪と志人)

漢末、清議といわれた談論批評のなかには政治批判を含んでいたが、その批判の牙がぬかれて風流玄妙な談論に變質したのが清談であつて、その變質を迫つたのが當時の執政者であると魯迅はみたのである。『中國小説史略』のなかに、魏晋の政治のきびしい情況と知識人の風流談議を重ねてみる視點は存在していない。しかも『中國小説の歴史的變遷』で、『世説新語』が名士になるための教科書の役割を果したものとみているが、こうした現實的な見方にはいかにも魯迅らしい現實感覺がはたらいていて面白い。

現實感覺といえば、『中國小説の歴史的變遷』を讀んでみると、宋初の時期に『太平廣記』『太平御覽』『文苑英華』など多くの類書が編纂されていることにふれ、宋王朝が學者知識人を類書編纂に従事させて牢籠し、彼らの

政治批判を少しでも減じようとした政治的意圖から出たとみているのも、そうである。ここにも、魯迅は小説史論家として必要な現実的な時代感覺を鋭くはたらかせている。これはのちに彼が『四庫全書』所收本について、そのあくどい改竄情況の具體例をひきだして、悲惨な文字獄の實體をつきつけてみせながら、返す刃で一九三〇年代の國民政府がおこなった言論統制への痛烈な批判をゆるがせにしなかつた特異な現實感覺にもつながっている。

單に雍正・乾隆二朝の中國人の著作にたいしてとったやり口を見ただけでも、實に人を驚愕させるに充分だ。版木全部の焼却、刀で削り取る等の處置については暫くおくとしても、もっとも陰險なのは古書の内容を改削したことだ。乾隆期における『四庫全書』の纂修は多數の人々によって一代の盛事と讃えられているが、彼らは古書の格式を台無しにしたばかりか、更に古人の文章まで修正した。宮廷内に保存したばかりでなく、更に學問のやや盛んな處に頒布して、天下の知識人に閲讀させ、わが中國の作者のなかにも、かつて相當氣骨のある人物が存在していたということを永久に覺り得ないようにしたのである。(且介亭雜文、病後雜談の餘)

『四部叢刊』續篇に收める洪邁の『容齋隨筆』の清代刊本が削除した部分、晁説之の『嵩山文集』で改竄されて全く語意が違ってきている部分の具體例を、魯迅はこの「病後雜談の餘」でとりあげている。それは、清朝が自分の殘虐を掩いかくすために、同じ侵略異民族王朝の金、元人のためにその殘虐非道の振舞いを掩飾する作業であった。宋の洪邁の『容齋隨筆』の宋版の影印本、明の活字本と清刊本を照合した結果、清代刊本が削除した文章のうち、つぎの一條だけを魯迅は摘録している。

元魏は江陵を破った時に俘虜とした士民を貴賤の別なくすべて奴隸とした。北方の夷狄の風習ではみなそうするからである。靖康の後、金軍の手に落ちた者は、王公貴族の公子と顯官士大夫の家の子弟もすべて沒收されて奴婢となり、使役の用に供せられた。一人に毎月稗五斗を支給し、自分で春いて米一斗八升にさせ、それを乾飯まじとして用いさせた。一年に麻五束を支給し、それをつむいで衣服をつくらせた。これ以外には一枚の錢も一片の布地も手にわたらなかつた。麻をつむぐことができぬ男は一年中裸であつた。夷狄の中にはそれを可愛そうに思う者もいて、炊事當番をやらせ、時には大いに當つて煖をとることもあるが、外に薪を取りに出て歸り、また火の傍に坐ると、とたんに皮膚も肉もぞろぞろ剥げ落ち、數日ならずして死んでしまうのであつた。ただ手に技術をもつた醫者や刺繡職人などの類が重寶がられたが、不斷は地面に車座に坐り、破れた蓆や蘆を下に敷くだけであつた。客がきて宴會を開く時には、音樂のできる者を引っぱつてきて演奏させた。宴が終り客が歸つてしまうと、各々また元にもどつて相變らず輪になつて坐り、刺繡をするのであつた。生きようが死のうが全くかまわず、塵芥のようにしか考えられていなかつた。(同、病後雜談の餘)

『四庫全書』の編修にあつて、清朝が動員した數多くの著名な學者は、その仕事に没入することにより、厚遇されはしたが、清朝の政治を人間の立場から批判する力もまた完全に去勢されていた。それはかつて宋王朝が政治批判の口を封ずるために、『太平廣記』『文苑英華』『太平御覽』などの龐大な類書編修事業にすぐれた學者知識人を狩り出し、その精力を吸収してしまつた事情とおなじであつた。

『太平廣記』『四庫全書』が編纂されたことによって、後世の人々が大きな裨益をうけている事實を、魯迅は認め



なかつたわけではない。それを認めた上で、文章表現が一定の政治目的のために勝手に削除改竄される政治的情況のなかで、文學の自立性が確實に侵蝕されてゆく恐ろしさから、彼は目をそらすわけにはいかなかったのだ。

『中國小説史略』のなかで、清の李汝珍の『鏡花縁』にふれた魯迅は、この小説が「學を論じ藝を説き、典をあげ經を談じること、連篇累牘であつて、自己を能く表現していない。博識多通であることが小説であることを害している」とのべて、『鏡花縁』の作者李汝珍が小説のなかで、博識多通を誇りにするようになったのは、清朝の文字獄に原因があるとみているのは、慧眼だといわねばならぬ。

雍正、乾隆以來、江南の人士は文字の禍をおそれて、史實を避けて語らなくなり、その代りに經書や子書を考證し、やがて小學となり、藝術の微小すらもこれを取り上げた。しかし語れば必ず實に徴して空談することを忌んだため、博識の風が盛んになった。この風氣ができあがってしまふと、學者の面目も自らそなわつて、小説は乃ち「道聽途説者の造るところ」で、史家は「觀るべき無し」としたのだから、これを語ることをいさぎよしとしなくなった。しかしそれでも獨り李汝珍の作『鏡花縁』がある。(第二十五篇・清の小説で才學をあらわす者)

清朝の考證學がさかんになったのは雍正乾隆の文字獄を恐れて史實を論じることが忌避した學者たちが、經書や諸子の書、及び文字の考證にその學問的情熱を傾注するようになってからである。小學は文字の學問であり、博識の實證學である。實證學は繪空ごとを談じる小説を輕視する風潮を招くは必然である。そのなかで獨り李汝珍の『鏡花縁』があらわれてきたが、彼も『音鑑』の著で知られた音韻學者であつた。その『鏡花縁』が結局自分の博

識を賣り物にする性格の小説となつてしまつた必然性を、魯迅は清朝の特種な政治的情況と學問的背景のなかで、實にみごとにとらえている。

さらに清末にあらわれた『兒女英雄傳』『三俠五義』などの一連の俠義小説をみて、これをおなじ俠義を描いた清初の『後水滸傳』、清朝の安定期を迎えた道光時代の作『結水滸傳』などと比較しながら、魯迅はつぎのように分析している。

清初に流賊はことごとく平定されたが、遺民はいまだ明の舊君を忘れず、草澤の英雄が明のために活躍することをついに念願するようになった。だから陳忱は『後水滸傳』を作つて、李俊（水滸傳の人物）をして國を去り、遼羅に王たらしめたのである。康熙から乾隆に至る百三十餘年を歴て、清の威力はゆきわたり、人民は畏服し、士人も貳心を抱かなくなつた。だから道光の時に俞萬春は『結水滸傳』を作つて、一百八人をして一人も幸いに命を免れるものなからしめたのである。しかしこれはなお官僚の見解である。『三俠五義』は市井の細民の心理を描寫し、やや『水滸』の餘韻があるようにみえるが、しかしやはり外貌のみが似ていて、精神は別である。時に明は亡びてすでに久しく、説書の場所も北京になつていたが、これより先にしばしば内亂が平定され、游民は從軍して功名をたて、郷里に歸つて錦を飾つて大變田舎者を羨しがらせたものだ。だからすべて俠義小説の中の英雄は、民間にあつてつねに極めて粗豪で、大いに匪賊の氣味があるが、終には必ず大官僚の手下となつて、使いばしりをすることを光榮だと考へた。思うに心悅誠服して、樂んで臣僕となる時代でなければ、このような書は著されないのである。——其の時ヨーロッパ人の勢力は中國に侵入した。（中國小説史略、第

## 二十七篇、清の俠義小説と公案)

清朝の封建支配が強力にしたがい、俠義小説の性格がすっかり變り、小説のなかの俠義に生きる英雄もついに大官僚の走狗にしかすぎなくなつた。『水滸傳』と外貌だけは似ているが、作家の魂がすっかり別ものに變化してゆく過程に、魯迅は時代の變容と抵抗精神の稀薄化現象をおさえている。結語において、ヨーロッパ勢力の中國侵入を告げる魯迅の發言は、やや唐突であるが、小説の衰弱現象のなかに、社會の衰弱現象をあわせみようとする意識が、魯迅にあつたことを知らせる恰好な資料といえる。

かつて梁啓超が「一國の民を一新せんと欲すれば、まず一國の小説を一新せざるべからず」と論じたことを思いおこさせるものが、この『三俠五義』の小説に論及する魯迅の語氣のなかにある。清末の小説界は、おとこだての世界を描くことにおいて、明の『水滸傳』からはるかに後退していた。小説家の精神が後退し、小説自體が衰弱していたときに、ヨーロッパ諸國の中國への植民地支配がはじまつたとみる魯迅が、小説と時代との關係、小説と國民感情の關係を重視する啓蒙的批評家としての相貌をあえてかくそうとしないのは、舞台が『中國小説史略』であるだけに、大變興味ぶかいといえるであらう。

## 四

魯迅が時代の生活環境のなかに小説を置いて、兩者の必然的な關係をとりあげ、小説のなかに寫し出された時代の思想をほりおこすことにいかに注意ぶかくあつたかを知ることには、『中國小説史略』のもっとも重要な特色を發

見することにつながっている。小説が「街談巷語」として蔑視されてきたなかで、時代の政治と思想の情況が複雑にからみあった人間のいとなみが小説のなかに描きこまれていたのは、誰もが本気で考えなかった時期のことであれば、魯迅が『中國小説史略』のなかで展開した小説史觀がいかに畫期的で創造的な新鮮さをもっていたか、想像できるであろう。

確かに彼に先んじて清末の梁啓超が、「小説と社會の關係について」と題した小説論で、小説と社會の關係に着目して、小説の價値を重視する小説論を提唱した事實がある。そのなかで梁啓超は小説が人間界を支配する不可思議なちからをもつが故に小説を重視せねばならぬといっているが、この考え方は小説を「街談巷語」の小道としてしかみなかった従來の小説觀に、價値の轉倒を迫る發言であった。

しかしながら、梁啓超の小説論は、小説に内在する價値觀にまで入り、時代と社會と人心にかかわる小説のちからの不思議さときおこしたものでなかった。その意味で彼の小説論は外延的であり、啓蒙的であり、概括的な小説價値論の提唱にしかすぎなかった。文學の政治への有効性を考えるが故に、文學の政治にたいする極めて樂觀的な優位性を説くがごとくみえて、それは時によって政治の文學にたいする優位説に容易に轉換しかねない素因をはらむ小説論であった。

この點で、魯迅の小説論は梁啓超のそれと決定的にちがっていた。彼は梁啓超ほどに政治にたいする小説の有効性に樂觀的ではありえなかった。小説をもふくめて文學は權力や大砲のまえに無力であると考えることはしばしばであった。だからといって、魯迅は小説の價値を認めないわけではなかったし、「街談巷語」の小話こはなにすぎないと

いう認識とはすでに無縁であった。彼が『域外小説集』を出版して主に東歐スラブ系の翻譯紹介につとめたのも、その被植民地の文學、被壓迫民族の文學がおなじような境遇におかれている中國民族の人心にとって有効であると考えた上での文學的營爲であつたはずである。しかも翻譯とはいへ、文學固有の營爲であつて、政治的な價値に判斷されての營爲ではなかつた。『中國小説史略』の仕事の場合も、文學そのもの、小説そのものにそくした文學固有のいとなみであつた。云い換えれば、中國歴代の小説の具體的作品内容にそくして、個別の小説に密着しながら、それ自體のなかにある時代の政治的、思想的情況とのかかわりをあきらかにする作業であつた。

そもそも魯迅の文學にたいする發想の根底には、文學がそれ自身として他のものの價値に優先して絶對的な價値を保有するという認識はなかつた。そうした認識を自らにゆるさないところに、彼の文學的態度があつたともいえる。政治的立場によつて政策的に文學が利用されることを極度にきらう文學的態度も、實はおなじ認識の根からでつた。文學に内在する價値が社會のなかの人間の所産であり、それ自體が絶對的價値としては完結しないが、それだけに文學は、それを政策的に利用する政治的なちからに侵犯されない自律性をもたねばならぬことを主張した。

そうした魯迅の小説觀、文學觀が『中國小説史略』のなかでどのように表現されているか、それはこれからあきらかにせねばならぬ作業であるが、すでに彼はつねに小説の主題の構成を時代の社會的背景、思想的情況のなかで考える操作を綿密におこなっていることにも、一つの表現をみる。しかも小説史をたどりながら、魯迅は中國民族の性格がその上にどう現れているかということに思いをこらすことを忘れてはいない。中國民族の思考の樣態をおむね否定的な側面であるが、小説のなかからとりだす小説史の方法はやはり魯迅固有のものであろう。

小説の起源について、神話にそれをみることでは、彼もまた他の文學史家とおなじである。中國は他の諸外國に比較して神話の材料がきわめて少ないが、これはのちになって散亡したのではなく、本來的に少なかつたのであるというのが彼の説である。その理由については、(一)中國民族の先住地が黃河流域にあって、自然界の情形が厳しく、その生活は勤勉であることを必要としたので、實際を重んじ幻想をしりぞけるようになり、古い傳説神話を集めて大成することはなかつた。(二)孔子が出現して修身齊家治國平天下など實用を教義として、鬼神のことを語るところを欲しなかつたので、太古の荒唐無稽な神話傳説は儒者の口にのぼらず散佚するばかりとなつた。(三)中國民族には神と人鬼の區別がなく、新しい人鬼を次々に創り出しては、古い神にまつわる所謂神話が忘れられてゆく傾向があつた。——これが魯迅の中國神話貧困説の理由である。

自然環境説にしる、儒家思想説にしる、人鬼説にしる、いずれも中國民族の現實的性格を形成した原由をなすものである。想像的、幻想的思考が欠落して、きわめて現實處理に積極的であることは、今日の中國人の性格行動からも、首肯できることである。それは民族的性格として肯定的なものを一面としてもちながら、小説の起源となる神話の面では、否定的にはたらいっていることを魯迅は認めているのである。このことは文化的のみならず、政治的視野をも包攝する中國小説論として、今後に問題を發展させることも可能である。

漢代の小説といわれて傳わっているものに、班固の『漢武内傳』『漢武故事』、東方朔の『神異經』『十洲記』なものがあるが、いずれも六朝の制作であるとするのが、今日の見方である。従來、それを漢代の著名な文人に假託するところに、魯迅は中國的思考様式の一つの否定面をみいだしている。

現存の所謂漢人小説は、思うに一つとして眞に漢人の手になつたものはないだろう。晋以來の文人方士はみな僞作をつくり、宋明に至つてもなおその風習はつづいてゐる。文人は好んで狡猾なことをやりたがり、或は奇異な書を人に誇示したがる。方士は自らその教えを神聖なものにしようと考へてゐるが故に、往々に古籍を假托して人に衒てう。晋以後の人が漢に假托したことはあたかも漢人がこれを黃帝・伊尹に依託したとおなじようなものである。——大抵荒唐無稽な事を述べたのは東方朔、郭憲といわれ、漢の事に關したものは、劉歆・班固といわれている。そしてその大旨は神仙について述べることからでない。(中國小説史略、第四篇・今見る漢人の小説)

中國で書物を古人の名に假託するのは、六朝人にかぎらず、宋明の近世に至るまで、その風習が絶えないのだから、これは一つの中國的思考様式といえるであろう。それを魯迅は文人の狡猾とよび、方士の衒いだといふ。尙古主義の強い民族性はそれを容易に許容し、歡迎する。そうした假託の思想に魯迅は中國民族の思考様態の否定面を發見してゐるのである。彼が東方朔の『神異經』『十洲記』、班固の『漢武內傳』『漢武故事』を六朝人の僞作であるとみるのは、つぎのような根據にもとづいてゐる。

しかし『神異經』『十洲記』は『漢書』藝文志の上に記載されていないので、東方朔の作つたものではなく、僞作であると知ることが出来る。『漢武故事』『漢武內傳』は班固の文章と筆のリズムが違つていて、その上なかに佛家の語がはさまつてゐる——彼の時代は佛教が盛んに行われていず、しかも漢人は佛語を喜ばない——ので、僞せものと知ることが出来る。(中國小説の歴史的變遷、第一講・神話から神仙傳になるまで)

これが、六朝人が漢人班固、東方朔に僞託した證據だと魯迅はみる。實に簡潔で要領をえた判斷とみるべきである。

唐代の傳奇小説を論じたところでは、或る傳奇小説の終幕が悲劇であるのに、それを祖本とした金・元・明の戲曲がいずれも大團圓に結末を書きかえていて、魯迅はそこに獨特の中國民族の性格があると指摘している。その傳奇小説は白樂天の親友元稹が書いた『鶯々傳』という小説である。才子張生と佳人鶯々の戀の物語が主題であるが、張生が鶯々を棄てる悲劇で幕がおりの仕組みになっている。ところが、この小説に種をとって後世戲曲が澤山つくられている。金人董解元の『絃索西廂』、元人王實甫の『西廂記』、關漢卿の『續西廂記』、明の李日華の『南西廂記』、陸采の『南西廂記』はいずれも傳奇小説『鶯々傳』を素材にしたものであるが、傳奇小説と違って、才子佳人がめでたく結ばれる團圓劇におさめている。このことにふれて『中國小説の歴史的變遷』の「唐の傳奇文」で、魯迅はつぎのように述べている。

これは中國人の心理が非常に團圓を喜ぶからで、必ずこのようになっていく。おおむね人生・現實の缺陷について中國人も非常によく知っているが、それを云うことを願わない。なぜなら一たび云い出すと、どのようにしてこの缺點を補い救うかの問題が発生して、或る者は煩悶しなければならぬし、改良しようとすれば、事情がわずらわしくなるからだ。しかも中國人はわずらわしさと煩悶を喜ばない。現在もし小説で人生の缺陷をのべるようとすればそれは讀者をして不快に感じさせてしまうからである。したがって歴史上の團圓でないものは、小説では往々にして、それを團圓にする應報がなければならぬ。それに應報をあたえ、たがいに騙すの



だ。これは實に國民性の問題に關係している。

魯迅が『中國小説の歴史的變遷』の序文に、中國の小説の歴史は必ずしも進化の歴史ではなく、反復か錯亂かのいずれかであったとのべていることを思い出すが、中國小説史の進化をはばむものに中國の國民性、中國民族の獨特の思考様式があったことはいなめない。現實をみつめ、それと格闘するかたちで現實を處理するのではなく、それから目をそらして積極的な處理に責任をもとうとしない怠慢さが、安易に團圓の應報をつくりあげ、それだけに騙しあっているのは、ただ小説の筋書だけのことではなく、實に中國の國民性の問題だという魯迅のなげきは、當時の中國の情況のなかにあつて、切實な批判であつたといえるであらう。

## 五

『中國小説史略』の特徴として留意すべきもう一つの點は、魯迅が各時代の小説を論じながら展開している小説描寫論である。これは彼の小説に關する藝術的價值觀とわかちがたく結びつくものである。今、そのすべてを紹介することはできないが、いくつかの魯迅の小説描寫論として典型的であると思われるものをとりあげ、彼の小説觀にアプローチする一つのてがかりにしてみよう。

清代の最も傑出した諷刺小説とみなされるものに『儒林外史』がある。作者は吳敬梓で、清初雍正年間の作とされる。五十五回に及ぶ所謂章回小説で一貫した主人公が登場する長篇小説ではなく、當時の官界につながるさまざまな人物を描いて、それぞれに完結する短篇をつないで集成した作品である。雍正時代といえば、明が滅亡して百

年にもならない時期で、讀書人は官界への登龍門である科擧の試をめざして八股文の練達のみどころがけた時期であり、内なる徳の涵養とかかわりなく、表むきは聖賢たらんことを求める、いわば虚飾と野心にみちた讀書人であふれていた。この讀書人の輩を實際に見聞した吳敬梓がその生態を諷刺的に描いた小説が、この『儒林外史』であった。

敬梓が描寫したものはすなわちこの輩で、すでに多くは自から聞見したところに據る。しかも彼の文章はそれを書きこなすに充分なものがあつた。だからよく幽をてらし隱をもとめてあますところなく、凡そ官師・儒者・名士・山人・其の間に市井の細民をも、みな紙上に現身して聲態を活寫し、かの時代の世相を目前にあるがごとくならしめた。(中國小説史略、第三十三篇・清の諷刺小説)

かかる評價は魯迅が寫實小説としての描寫力を吳敬梓に認めるものである。寫實主義の小説は十九世紀の後半に台頭してきたブルジョワジーの實證的、科學的精神が社會をよく觀察して描いた寫實的要素のつよい小説を意味する。フランスではバルザック、スタンダール、フロベール、ロシアではゴッゴリー、レルモントフ、トルストイの諸作品がその種の小説の顯著な作家であつた。魯迅はなかでもスラブ系の寫實小説の影響を、つよくうけていただけに、寫實的要素が強く、諷刺のきいた『儒林外史』の描寫にひかれるものがあつたのであろう。

明の羅貫中の『三國志演義』の人物描寫にふれて、魯迅が「人間を描寫するにしても頗る失敗しているところがある。劉備の長厚をあらわさんとして偽者らしくなり、諸葛孔明の多智を描こうとして狡猾なるものにしては、ただ關羽については特に好描寫が多く、義勇の氣概は時として目に見えるようである」(中國小説史略、第十四篇・元

明傳來の講史」と論じているのも、寫實主義的描寫論の具體的展開だとみてよい。關羽の義勇の氣概を描く羅貫中の筆致に、「目に見えるような」好描寫をみとめ、おなじ筆者の劉備玄德、諸葛孔明の人物描寫に、筆者がもともと形象化しようとしたねらいとは相違する描寫の乘離現象をつく批評がそれである。『中國小説の歴史的變遷』では、この『三國志演義』の人物描寫について、ほぼおなじ角度からつぎのように論じている。

描寫が實に過ぎてゐる。好い人を寫すのに全く一點も悪いところがない。そして好くない人を寫すのに全く一點も好いところがない。其の實、これは事實とはそぐわぬことである。なぜなら一個の人間はことごとくすべて好くはないし、またことごとくすべて悪くはないからである。たとえば曹操だが、彼には政治の上では彼の好いところがあり、しかして劉備、關羽等にいささかも問題がないとはいえないが、しかし作者はそれにもかかわらず、ただ主觀的な面にまかせて描寫し、往々にして情理の外に出づる人物をつくっている。(第四講・宋人の説話とその影響)

曹操を漢の王室の篡奪者として徹底的に惡役に描き、劉備を漢室の正統な後繼者として徹底的に善玉に描くのが、『三國志演義』である。これが當時の民衆の歴史觀であつた。そもそもその小説は市井街巷の盛り場で、宋元時代から演じられてきた三國時代の故事を内容とする戯曲、講談の類から發展し、それを小説に集大成したのが、羅貫中である。「實に過ぎてゐる」と魯迅が批評するとき、東晉の陳壽が著した正史『三國志』のなかの曹操像なり、劉備像が彼の頭のなかにあつたのである。羅貫中は必ずしも「主觀的な面にまかせて描寫した」のではなく、むしろ從來からの民衆史觀に羅貫中がとらわれて、それから自由になれなかつたために、自分の目と見識で歴

史上の人物を活寫できなかつたところに、かかる「實に過ぎている」缺點が生じたのである。歴史小説には踏まえねばならぬ事実がある。その事実をまげてはならないが、事実と事実を結ぶところに、作家の想像力がはたらく餘地がある。かくて作家の独自の史眼と見識が歴史事実の場に參加するのである。

「往々にして情理の外に出づる人をつくり」「實にすぎている」とすれば、その人物描寫は寫實描寫の原理をふみはずしているといえるであらう。こうした寫實性に缺けた『三國志演義』とは全く對照的な小説として、魯迅は清の曹雪芹の小説『紅樓夢』をとりあげ、その人物描寫を高く評價している。

その要點は寫實描寫を敢てしていることであり、けつして虚飾がない。これまでの小説が好人を完全に好人として描き、悪い人を完全に悪い人として描いているのとは大いに異っている。したがって『紅樓夢』に描かれる人物はすべて眞なる人物である。總じて『紅樓夢』が現われて以後は、傳統の思想と描寫法は打破された。(中國小説の歴史的變遷、第六講・清代小説の四派とその末流)

『紅樓夢』は清の乾隆三十七年(一七九二)に最初の木活字本がでている。物語は作者曹雪芹の分身とみられる賈寶玉をめぐる二人の女性、薛寶釵と林黛玉との愛情の交流と起伏を軸にして當時の貴族の華かな生活を描いたものである。魯迅は虚構の世界でも、なんらかのかたちで作者の自己が描かれていない小説でなければ小説とはみなさない。その意味では、魯迅が、作者の姿を投影させて、作者の生きた生活環境を如實に描きかけた『紅樓夢』に寫實描寫があり、虚飾がないとみて、高い評價を與えたのはうなずける。先に引用した『中國小説の歴史的變遷』の『紅樓夢』の人物描寫論のなかで、魯迅がはつきりと、「寫實描寫」という評語をつかっていることに、我々は改

めて注意する必要がある。中國では『水滸傳』『西遊記』に『金瓶梅』をあしらって、三大奇書と稱しているが、魯迅はそのなかでもとりわけ『金瓶梅』のもつ藝術的香氣にふれ、世態人情の洞達した作者の描寫手腕に舌をまいてる。

作者は世情に關してはまことに洞達をきわめている。およそ形容するところは、或いはのびやかに、或いはつぶさに、或いは深刻にして様相をつくし、或いはおくぶかく諷刺を含み、或いは一時に兩面を並び寫してたがいに照應させ、變幻のさまがいたるところにあらわれている。同時代の小説でこれ以上の手腕のものはあるまい。(中國小説史略、第十八篇、明の人情小説)

『金瓶梅』の作者は笑々生ということはわかっているが、笑々生がいかなる人物かはまだ不明のままである。そこで明の嘉靖の人で、當時の名士でもあった沈德符はこの笑々生に明代きつての文人王世貞を擬した。このため王世貞がかかる淫書を造り、その紙に毒をぬって、父の仇である嚴世蕃を殺そうとはかったのだというまことしやかな噂さが巷間にひらがったほどであった。逆にいえば、作者を王世貞に擬するほどに、この豪商西門慶とそれとをりまく三人の淫婦をめぐって、當時の世情の生態を描きとめた『金瓶梅』は藝術的にもすぐれていたのである。

この書を作ったのは専ら市井間の強夫蕩婦を寫すためであると謂うのは皮相な見解で、本文を讀めばそうはいかないことがよくわかる。西門慶はもと世家と稱せられた縉紳であり、ただ權貴と交わったのみならず、士大夫階級とも遊んだ。だから彼一家のことを書けば、すなわち諸方面を盡すことができる。蓋し下流の言行を描寫して、これに筆伐を加えたというだけでない。(中國小説史略、第十八篇・明の人情小説)

魯迅は『金瓶梅』が淫書だという悪名をあたえられたのは間違いでであると指摘して、當時の社會に淫風を助長する風潮があったと語り、その歴史的事例をあげている。成化の時、方士の李孜省、僧の繼曉はすでに房中術を獻じてにわかにならざるを得たし、嘉靖年間にも、陶文仲が處女の經血で造った房中藥「紅鉛」を進獻して寵を得ており、さらに盛端明・顧可學といった進士出身者も童貞の尿中から造った房中藥「秋石方」を獻じて大官の位を得た。これからというものは、人々は智力をつくして奇しい處方薬を求め、世間は閨房秘事を談じて恥としなくなり、かかる世風が文壇にも影響し、『金瓶梅』のなかにも、強夫蕩婦の交情が描かれるようになった。しかしながらそれだけを寫すための「小説」書ではなかったことは、魯迅がここで典型化ということばこそつかっていないが、西門慶という豪商の一家に小説描寫の焦點をあわせる方法がいかに明代社會の世情とそこに生きる人間の姿態を描破する上に適切であったかを指摘していることで、端的に理解できるであろう。

寫實であるか、非寫實であるかの問題が描寫論にかかわる場合に、主人公の典型化がうまくいっているかどうかにかかるところがある。ゴッソーの檢察官も、魯迅の阿Qもいずれも否定的形象であるが、虚構の世界であれほど生き生きとしているのは、作者が作中人物の典型化に成功しているからである。典型化の方法は二つの面で實在感がなければ成功はおぼつかない。典型化された人物形象が普遍性をそなえて實在しているかどうか有一點であり、それが特殊性をそなえて實在しているかどうかは他の一點である。この二點に、實は小説家が典型化に取組む際の成否の鍵がある。『阿Q正傳』についていえば、阿Qはながい間魯迅のなかにあたたためられていた架空の人物であるが、中國の農奴として描かれた阿Qが発表當時、幾人かの知識人に、自分のことを諷刺しているのではな

いかと思わせたのは、普遍性を具えた實在感が阿Qにあったからである。現實には阿Qは實在しなかつたであらうし、たとえ實在していたにしても、魯迅が農奴の生活を熟知していたとはいえない。中國の農奴の生活現實よりも中國知識人の精神構造の觀察のほうに、魯迅の目はゆきとどいていたにちがいない。中國小説史を講じて、彼は大團圓を好む中國民族の性格は實人生の缺陷をみて、それを改め救うために煩悶することをさけるところからきているという意味のことを語っているが、阿Qが精神勝利法の典型だといわれるのもこの團圓を好む中國知識人の精神構造とかさなっている。強い者から抑壓されると、それに抵抗することなく、自分より弱い者に腹いせをしてうさをはらすやり方、困難な問題に出逢うと、それを直視して解決につとめることをさける場合に、自分をごまかして納得させてゆくやり方、これが所謂精神勝利法であるが、それが知識人の精神構造にある典型的な自己欺瞞の方法であることを魯迅は知っていた。阿Qの典型化が普遍性を具えて實在感をもつ理由がそこにある。しかしながら阿Qもまたかぎられた一定の時間のなかに生きている特殊性の存在である。辛亥革命の時間と空間のなかで生きていたために、農奴阿Qは革命を欲し、革命黨を自稱して、結局は處刑場にひかれてゆくことになる。ここにまぎれもなく農奴阿Qが経験しなければならなかつた時間と空間の特殊性が存在していた。もっとも痛切に革命を欲した阿Qは革命から裏切られて殺される。阿Qの典型化が特殊性を具えて實在感をもつ理由はそこにある。

『金瓶梅』の主人公西門慶は明代ブルジョワジーの典型的なステロタイプであった。『金瓶梅』の作者がこの人物を作中の主人公に設定したところに、この小説が明代社會の現實を觀察した寫實小説として成功した秘密があった。魯迅は、それを知り、それを高く評價した。そのことは、『金瓶梅』が寫實小説としてすぐれるのは、西門慶

の典型化が、その普遍性と特殊性を具えて實在感をもっているという認識が、あきらかに魯迅にあったことを告げるものでもあった。

## 六

魯迅の小説觀を要約すると、小説のなかから道義的な懲勸を排除することにあつたといえる。云い換えるならば、小説がつくりものとしての面白さをもち、その面白さをとおして人生社會を考えさせるものであるという小説觀である。魯迅が修身の教科書と小説を區別することに熱心であつたのは、小説に關する中國特有の思想環境が外にあつたからである。

小説は街談巷語で道の大事とかかわりのないこぼなしたと規定したのは、班固の『漢書』藝文志である。班固の分類では諸子のなかに一應組み入れられているが、雑家の末につらねるにすぎない。小説が人生の大事を語る大道となんのかかわりもなく、市井で娛樂として語りつがれたものにすぎないとしながらも、班固は古代には稗官という小吏がいて、そうした片々たるこぼなしを集めて、政治の參考の具に供しようとしたのだと考える。これが後漢の時代から中國の思想環境のなかにある根強い功用主義である。民間に傳承されてきた小説には、この種の功用主義が入りこむ餘地はなかった。功用主義の思想環境をつくりあげたのは儒教的知識人の思考である。詩にくらべて、小説をはるかに蔑視した知識人は勸善懲惡の思想の網の目のなかに、こぼなしさえもとりこむ精神的風土を形成していた。この精神的風土のなかで、知識人が書く小説に政治と道徳に癒着する傾向が生じたとしても、それは



いっこうに不思議な現象とはいえなかった。この傾向を極力排除するのが魯迅の小説観である。

清の初めに『聊齋志異』『閱微草堂筆記』など文語でかかれた短篇小説集が現われてくるが、これは様式内容からみて六朝の志怪小説、唐の傳奇小説の復活現象であった。『聊齋志異』『閱微草堂筆記』の二書は、その種の小説として傑出していたが、それを襲った梁蕭辰の『地上常筆記』、許奉恩の『里乘』などの小説について、魯迅は「盛んに禍福のことをつらねて専ら勸懲を主としており、すでに小説というにたりない」としりぞけている。ここにも、魯迅の卒直な小説認識が表明されている。

唐代の傳奇小説は六朝時代に現れた志怪小説に種をもとめてはいるが、はじめて小説を意識的に構想し、創意工夫をこらしたとみる魯迅の評價はすこぶる高い。『中國小説史略』の第八篇「唐代の傳奇文」をみると、明の胡應麟が「變異の談は六朝に盛んになり、然れども多く舛訛を傳録し、未だ必ずしも幻設の語を盡さず。唐人乃ち意を作して奇を好むに至りて、小説に假りて以て筆端に寄す」と、傳奇小説の特質を論じた文章を引いて魯迅は、これにふかく共鳴している。胡應麟の所謂「作意」「幻設」とは、小説を意識的に創造する虚構の世界を意味していたからである。

傳奇小説が流行した當時は、韓愈、柳宗元などの古文派の文人たちが活躍した時期でもあるが、彼らに「圻者王承福傳」、「種樹郭橐駝傳」などいづれも意識的に創造された幻設文があり、内容も傳奇と頗る近似していることをのべた魯迅は、これと傳奇文とのちがいをはっきりと指摘している。それは韓柳の幻設文が阮籍の「大人先生傳」、陶淵明の「桃花源記」「五柳先生傳」などの流れを汲むもので、「寓言を本として、文詞を末とした」のにくらべ

て、傳奇小説は「その源は思うに（六朝の）志怪から出て、これに文飾をほどこし、その波瀾をひろげたものである。だから出来上ったものは特異である。そのなかには諷諭に託して牢愁をのべ、禍福を談じて懲勸を寓しているものもあるが、結局のところは文采と意想を目的としていた」（中國小説史略、第八篇・唐の傳奇文）として兩者の間に截然たる差異を認めている。唐代の傳奇小説の一部が、なかに政治と道徳にかかわる諷刺と懲勸を寓することでは、韓愈、柳宗元の幻設と共通しているが、おおむねの傳奇小説のねらいは、「文采」と「意想」、つまり修辭と構想のなかで奇異な出來事を寫すことであつたと、魯迅はみている。魯迅は勸善懲惡の道德的、宗教的要素、諷諭教化の政治的要素を極力排除し、修辭と構想の要素を重視するところに、彼の小説觀を成立させていたことを知るであらう。

このような魯迅の小説史觀がもっとも明快に表明されているのは、『中國小説の歴史的變遷』の第四講「宋人の説話及び影響」においてである。

傳奇小説は唐の滅亡の時に絶えてしまった。宋朝になると傳奇をつくるものもあつたけれども、おおいにおなじではない。なぜなら唐人は大抵時事を描寫したが、宋人のは多く古事を講じているし、唐人の小説は教訓が少ないが、宋人のは極めて教訓が多いからである。おおむね唐の時には講話は自由であり、時事を寫したけれども、禍いをこうむるにはいたらなかった。しかるに宋の時は忌諱がしだいに多くなり、文人は法の網の目をさけて古事を講じたのだ。加えて宋の時は理學が一時にきわめて盛んで、それで小説もまた理學化し、小説に教訓を含くまねば云うに足りないと考えた。しかし文藝の文藝たる所以は教訓であることを喜ばない。もし小

説を修身の教訓書に變えてしまふならば、どうして文藝といえよう、宋人はなお傳奇をつくつたけれども、私  
が傳奇は絶えてしまったといったのは、この意味である。

魯迅の小説觀は文藝が教訓道德から自立することをめざすものであり、道德の他律的支配のもとに、小説が書か  
れることを嫌うものであった。その意味で文藝の純粹性、文藝の藝術性を主張する文學論であるといえる。しかし  
ながら、魯迅の小説觀はそこにもとどまっていない。それは「唐の時には講話は自由であり、時事を寫した」と  
いう彼の發言にかかわる問題がある。先にあげた清初の紀昀の小説集『閱微草堂筆記』についての魯迅の批評をみ  
れば、この問題を具體的に把握できるであらう。

彼がつくつた『閱微草堂筆記』は完全に六朝を模倣し、質を尙び華をしりぞけ、敘述は簡略であり、つとめて  
唐人の作法をさけた。その話の材料はだいたひ紀昀みずからがつくつたもので、多くは狐鬼の話をかりて社會  
を攻撃している。私の見るところでは、彼自身は狐鬼を信じない人であるが、彼は一般の愚民にたいして神道  
をもつて教えなければならぬと考へていたにすぎない。しかしながら、彼は非常に佩服すべき部分をもつて  
いる。彼は乾隆の間、法律のもつともきびしい時代に生れたのであつて、文筆をかりて社會上に通用しない禮  
法やでたらめな習俗を攻撃して、當時の目でみれば、眞に氣魄をもつ大人物とみなすことができる。しか  
し末流にいたると、彼の社會攻撃を理解することができず、ただ神道をもつて教えようとする一面的な意味を  
學ぶだけで、ここにおいてこの派の小説はほぼ勸善の書に變つてしまつた。(中國小説の歴史的變遷、第六講・  
清の小説四派とその末流)

紀昀の筆記小説の主なる内容は狐鬼の談であり、鬼神の情状を語ることにあったが、その志怪者流の奇譚のなかにあって、彼は清朝異民族支配の最もきびしい法紀をかくぐり、人間を抑壓する習俗への忌憚のない諷刺をひそませたのである。

文學が道德の道具になることを嫌い、極力文學の自律性を説いた魯迅であるが、彼はまた文學が藝術の高さにおいて社會批判に有効に機能するちからをもつことを、けつして否認してはいない。小説は時代を超えて普遍的な藝術性を具えるものであると同時に、かざられた現實の時間と空間のなかで時代的特殊性をあわせもつものである。

作家はその特殊性の造形なかで當面する社會的現實となんらかの意味でかかわってゆかざるをえない。文學がそれ自體として絶對的な價值があるとは認めがたいところに、文學の自律性をつねに問いかけてきた魯迅の文學的態度は、現實參加のスピリットを喪失し、ただ勸善の具に墮してしまつた清末の小説に假借なき批判を浴びせたのである。かかる彼の文學的態度は『中國小説史略』や『中國小説の歴史的變遷』で中國の小説史を講じるさいにも、なお顯著であつたといえる。未成熟ではあつたが、新しい時代の要請として一八九〇年代の後半に登場した小説の思想は、僅かに二〇年の歳月を經過した一九二〇年代の魯迅の小説觀にいたつて、かくも豊かな成熟をみたこと自體驚異であるといわねばならぬ。

久しい間、中國の知識人の間にあって賤蔑視されてきた小説が、その内在的な價值において、詩や書畫に劣らぬ藝術であることを見直し、社會的所産としての小説を時代の社會と思想の情況とのかかわりのなかで、歴史的に把握したのは、この魯迅の『中國小説史略』にはじまる。清末、嚴復、梁啓超の小説重現はそれが人間の教育、政治

の刷新に有効なはたらきをもつものとしてあるが故の提唱であった。黃摩西、王國維の純美性をもとめる小説論はヨーロッパの小説美學からのかりものでしかなかった。魯迅の「小説の思想」はこれらの清末の小説論の影響をうけながら、それにあらがい、それをこえるものとしてあらわれている。そこに小説の思想家としての魯迅の偉大さがあるといえる。小説を外在的な價值ではかることで、小説の價值を見直したとしても、それはつまるところ従來からの小説賤蔑の價值觀を裏返しにしたにすぎない。中國の小説が西歐の小説美學をそのまま適用するかたちで論じられることは、中國小説固有の普遍性と特殊性を相殺することになる。

魯迅はそのいづれの方法にもよらなかつた。彼はまず中國小説を文獻的に校勘整理する入念な基礎作業からはじめて、それに關する舊聞資料をできるだけあつめ、中國小説の一つ一つの内容の特質にたちいりながら、その繼承發展の方向をおさえるという地道な手續きをおして、彼なりの中國小説の專史をつくっていったのである。中國小説の固有の思想と様態に綿密にして冷嚴な觀察を加えることによって、清末一つの思想としてたちあらわれた「小説の思想」を、魯迅は誰よりも着實に、誰よりも豊かに成熟したかたちで、自己の内に形成することを可能にしたまことに稀有な思想家であつたといえるであらう。